

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：32604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380852

研究課題名(和文) 集団の尊敬による集団間紛争解決過程の解明

研究課題名(英文) Effects of intergroup respect on intergroup conflict resolution process.

研究代表者

熊谷 智博 (KUMAGAI, Tomohiro)

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号：20400202

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：集団間の紛争を解決するためには、対立集団に対するイメージを改善し、成員の建設的態度を形成していく必要がある。本申請課題では対立集団のイメージおよび集団間紛争解決に対する尊敬の効果を検討した。外集団に対する尊敬は外集団の人間性知覚(温かさと有能さ)と集合的感情(集合的罪悪感など)を介して、人々の紛争解決的態度(謝罪と補償)を強めていた。また内集団が対立集団から尊敬されているというメタ尊敬も、基本的には同様の心理過程を経て紛争解決の態度を強めていたが、その過程においては外集団に対する親密さという集団間感情と外集団に対する象徴的脅威が大きな影響力を持つことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：To resolve intergroup conflicts, it is necessary to create a positive image of the conflicted outgroup and to then create a constructive attitude toward the outgroup. In this project, the effect of respect on the outgroup image and intergroup conflict resolution was examined. Results indicated respect for the outgroup enhanced the perceived humanity of the outgroup members (warmth and competence), strengthened collective emotions (collective guilt), and increased the supportive attitude for apology and compensation to the outgroup. Further, meta-respect, which is the sense of being respected by the outgroup, enhanced outgroup humanization, collective emotion, and supportive attitude toward conflict resolution. Specifically, with reference to intergroup conflict resolution, it was indicated that intimacy with and symbolic threat perceived from the outgroup affected the psychological process of meta-respect.

研究分野：社会心理学

キーワード：集団間紛争 紛争解決 和解 尊敬

1. 研究開始当初の背景

集団間の葛藤や紛争は現代社会が抱える深刻な問題の一つであり、社会心理学は初期よりこの問題を検討してきた。その中でも一定の成果を上げているのが、内集団のアイデンティティを変えることで集団間紛争を低減させる研究である。その代表は Gaertner & Dovidio (2000) の共通内集団アイデンティティモデルである。このモデルでは対立集団同士で共有可能な社会的アイデンティティを形成する事で外集団へのネガティブな態度を低減させる。それ以外にも交差カテゴリー化 (Crisp & Hewstone, 1999) や多重カテゴリー化 (Crisp, Hewstone & Rubin, 2001) においても対立集団と共有しているアイデンティティを顕現化させることによって外集団へのネガティブな態度を低減させることが報告されてきた。これらのアプローチは理論的にも実践的にも一定の成果を上げており、集団成員が対立集団とその成員に対するネガティブな態度をポジティブな態度へと変える心理過程を検討しているという点が共通している。

そのような研究状況に対して、申請者はこれまで集団間紛争に関して実験室実験と社会調査によって関連する知見を得てきた。特に申請者の科研費による研究 (若手研究 (B) 2010 年度 - 2013 年度「道徳性知覚による集団間葛藤解決過程の解明」(課題番号: 22730474)) では集団間協力や外集団に対する道徳性の知覚が、集団間のポジティブな関係構築への態度を強める事が明らかになった。例えば熊谷 (2013) の研究では、日本人対学生を対象に、中国人の特性知覚が中国人への協力的態度を強めており、特に道徳性の知覚は、有能さや社会性の知覚とは異なる効果を持ち、中国との歴史的問題に対する補償への積極的態度を強める事を明らかにした。

2. 研究の目的

本申請課題では「集団的尊敬」が建設的集団間関係の形成を実現する心理過程の検討を目的としていた。ある集団に対するポジティブな特性知覚は外集団に対するポジティブな態度を形

成する。従ってある集団を尊敬できると知覚すること = 集団的尊敬も、上記の道徳性知覚と同様に集団間関係に対してポジティブな効果を持つと予測した。特に人々は尊敬する対象に対して接近し同一化しようとするため (例えば Tesser, 1988) 集団が自発的に外集団との接触を求めようになる点で、従来の集団接触や共通アイデンティティ研究とは異なる集団間解決研究の新しいモデルを提供すると推測した。

更に本申請課題では外集団に対する尊敬だけではなく、内集団が外集団から尊敬されているという知覚 = メタ尊敬が集団間紛争解決に与える影響について検討することを目的としていた。メタ尊敬は内集団のイメージに係わる為、内集団の努力によってそれを獲得することが出来る。従ってこれを検討する事によって、外集団の努力と協力を求めること無く、内集団の主導的取り組みによる集団間紛争解決の促進可能性を検討できると予測した。

尊敬の概念は美徳の概念や宗教観と関連があると考えられるので、各文化圏によって差が見られる (例えば経済的成功) と予想されるが、その一方で集団形成や維持の機能と関連する点 (例えば利他的行動) では共通性も考えられ、集団間紛争解決においては後者の共通性を活用することがより効果的であると予測した。本申請課題の研究は集団間紛争を解決する為の集団接触研究に関して新しいアプローチを提供すること、特に内集団の努力によって外集団に対する協力的な態度を抱くようにするという新しい紛争解決法を提案していた。

3. 研究の方法

集団間紛争解決に対する集団的尊敬の効果を検討するために、大学生及び一般市民を対象とした質問紙調査を実施した。研究 1 では外集団として中国人を用い、第二次世界大戦時における日本の、中国人に対する行為に対して謝罪及び補償を政府が行うとしたら、その政策を支持するかどうかを質問紙で回答を求めた。回答者は大学生 129 名であった。外集団に対する尊敬

が集団間和解を促進する心理メカニズムとしては外集団に対する尊敬によって外集団成員の人間化が促進されると予測した。人間化の尺度としてはFiskeら(2002)のStereotype content modelに基づき、中国人に対する「温かさ」と「有能さ」の知覚の程度を測定した。更に外集団の人間化が内集団の過去の加害行為に対する罪悪感である集合的罪悪感と、そのような加害行為の責任を認める集合的責任認知を介して謝罪と補償に対する支持的態度を強めると予測し、Cahajic-Clancyら(2011)の集合的罪悪感及び集合的責任認知に関する質問項目も用いた。

研究2ではインターネット調査を用いて日本全国500名を対象とした調査を実施した。対象者の年齢は20歳から69歳まで、年齢、男女の構成は均等になるように回答者を配置した。そして研究2では外集団に対する尊敬ではなく、外集団が内集団を尊敬していると推測している程度、すなわちメタ尊敬が集団間紛争解決的態度に与える影響を検討した。集団間紛争は研究1と同様日中関係とし、解決的態度も同様の項目を用いた。また外集団の人間化と集合的責任認知及び集合的罪悪感も研究1と同一の項目を用いた。これらにメタ尊敬の項目を追加して、調査を実施した。

研究3では研究2と同様、インターネットによる全国調査を行った。回答者は309名、20歳から70歳までの男女を各地域で均等になるように配置した。研究3では集合的感情に焦点を当て、これまでの集合的罪悪感に加え、集合的困惑と集合的羞恥の項目を加えた。

研究4ではこれまでの調査結果の外的妥当性を検討するために、外集団を中国人から韓国人とフィリピン人に変更して同様のインターネット調査を行った。韓国人とフィリピン人が外集団成員として選ばれたのは在日外国人の上位3か国が中国、韓国、フィリピンであったためである(2016年時点)。回答者は日本の5都府県(東京、神奈川、名古屋、大阪、京都)在住の20歳から70歳までの男女578名であった。

また研究4ではOxford大学のMiles Hewstone教授と共同で、日本に在住する外集団成員に対する象徴的脅威と現実的脅威の知覚に関する項目も追加し、それがメタ尊敬から集団間紛争解決に至る過程において与える影響についても検討した。

4. 研究成果

研究1で用いた項目得点に対して、外集団に対する尊敬が集団間紛争解決を促進するという仮説に基づきパス分析を行った。理論モデルに従い始めに謝罪と補償政策を目的変数、外集団尊敬、人間性知覚としての中国人の温かさ知覚、有能さ知覚、集合的罪悪感と集合的責任認知を説明変数として重回帰分析を行った。次に集合的罪悪感、集合的責任認知を目的変数、外集団尊敬と人間性知覚を説明変数として重回帰分析を行い、更に人間性知覚を目的変数、外集団尊敬を説明変数として回帰分析を行った。結果は図1の通りであった。

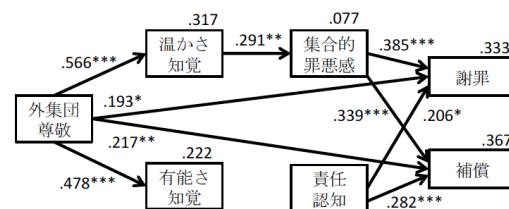


図1. 集団間和解的態度に対する外集団尊敬の効果のパス分析結果(研究1) *** $p < .001$, ** $p < .01$. 変数右上の数値は重決定係数

これらの結果は予測通り外集団に対する尊敬による集団間紛争解決の可能性を示唆しているが、同時に人間性知覚の効果に関しては、有能さよりも温かさの方が重要な役割を果たしていることも明らかにしている。言い換えると外集団に対する尊敬から生じる人間性知覚は信頼や道徳性と関連の強い、将来的な関係性と大きくかわる温かさの次元に焦点が当てられて、外集団が自集団との関係においてどのような利益を持つかという有能さに関する評価は集団間紛争解決にあまり影響を与えていないと考えられる。更に集合的責任認知に関しては、それが集団間紛争解決に効果があることは示されたが、研究1で用いられた変数が集合的責任認知を強めることは無かった。このことは感情要因であ

る集合的罪悪感と認知要因である集合的責任認知は別の心理過程を経ている可能性を示唆している。

研究2では外集団に対する尊敬ではなく、外集団から尊敬されているという感覚、すなわちメタ尊敬が集団間紛争解決に与える影響を検討するパス分析を行った。研究1との違いは、日本人が中国人から尊敬されていると思う程度をメタ尊敬得点と、メタ尊敬から生じることが予測される集団間感情として中国人に対する親密さの項目得点を追加した点であった。結果は図2の通りであった。

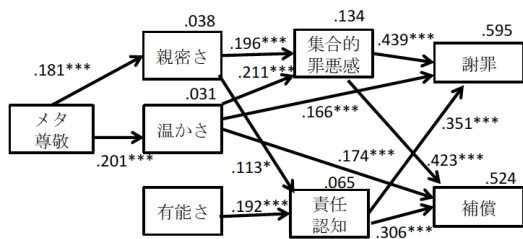


図2. 集団間和解的態度に対するメタ尊敬の効果のパス分析結果(研究2) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. 変数右上の数値は重決定係数

この結果は集団間紛争解決に対する外集団尊敬とメタ尊敬の効果の違いを明確に示したものである。すなわち外集団尊敬は外集団に対する認知をポジティブな方向へと変化させることで集団間和解を促進するというメカニズムを備えているが、メタ尊敬はそれが自集団に関する認知から開始される過程であり、そこから生じる外集団に対する親密さというポジティブな集団間感情が新たに影響力を持つという特徴を持っていた。更に外集団知覚に関しても温かさとは有能さではその効果が異なることが明確になった。具体的には温かさはメタ尊敬によって強められ、それが集合的罪悪感を介して集団間紛争解決を促進していたが、集合的責任認知にはそのような媒介効果は見られなかった。一方、有能さ知覚は集合的責任認知を強めており、罪悪感といった主観的感情に大きく依存する判断よりも、責任判断という認知的処理に大きく依存する判断に関しては、相手の能力評価が大きな影響力を持つという、外集団に対する感情的判断と認知的判断の差異が明確になった。

研究3では集合的感情に焦点を当て、これまでの集合的罪悪感に加え、集合的困惑と集合的羞恥の項目得点を加えて、研究2と同様のパス分析を行った。その結果は図3の通りであった。

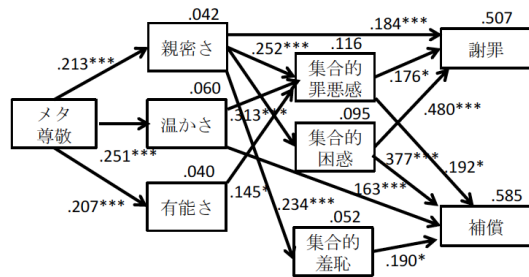


図3. 集団間和解的態度に対するメタ尊敬の効果のパス分析結果(研究3) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. 変数右上の数値は重決定係数

これらの結果の特徴として、第一に親密さ感情の影響の大きさが挙げられる。特に集合的感情の全てに対して親密さは影響を与え、それが集団間紛争解決への支持を促進していた。これらは外集団に対する温かさとは有能さ知覚よりも影響が大きいことを示しており、メタ尊敬が集団間紛争解決に対して影響を与える際の、外集団に対する親密さの重要性を示唆するものである。

研究4ではこれまでの理論モデルの妥当性を検討するため、外集団を韓国とフィリピンとし、さらに外集団に対する象徴的・現実的脅威の項目を追加して分析を行った。韓国を対象としたパス分析結果は図4の通りであった。

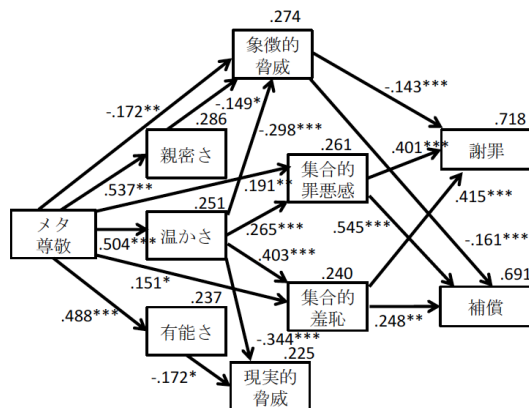


図4. 韓国人への和解的態度に対するメタ尊敬の効果のパス分析結果(研究4) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. 変数右上の数値は重決定係数

一方、フィリピンを対象とした分析では、図5の通りであった。紛争解決対象としての外集団が韓国かフィリピンかによって、集団的紛争

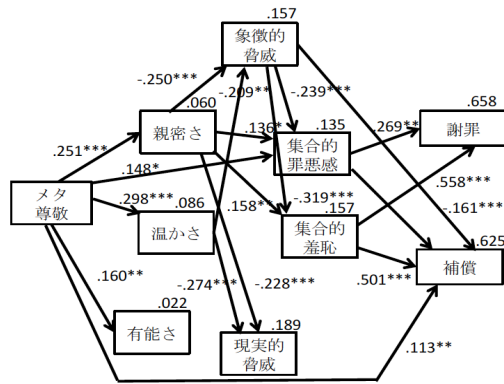


図5. フィリピン人への和解的態度に対するメタ尊敬の効果のパス分析結果(研究4) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$. 変数右上の数値は重決定係数

解決に至るまでの心理過程に違いが生じたことについて、その原因としては対象集団との事前の態度、及び競争の関係から生じる脅威が影響したと考えられる。合理的に考えれば集団間競争状態の低下は心理的にも物質的にも利益をもたらすので、紛争解決によって協力的関係を築くことに多くの人は反対しないと考えられる。しかし実際には多くの人がそれを躊躇うのは外集団の脅威が強く、利益よりも象徴的損失が上回ると考えるためである。従って象徴的であれ現実的であれ、脅威が低下することは元々持っていた集団間紛争解決という合理的判断を下し易くなり、その結果集合的罪悪感や羞恥といった、高次の感情による媒介を必要としなかったと考えられる。それに対してフィリピンは日本にとっては競争的・脅威的關係性は低く、むしろ日本人にとっては相対的に低勢力集団と認知されていると考えられる。そのため集合的罪悪感や羞恥が喚起されやすく、集団間紛争解決に対する支持が高まる際にはこれらの感情を媒介しやすかったことが考えられる。

本申請課題では集団間紛争の解決における、対立する集団全体に対する尊敬と、対立集団から尊敬されているという感覚が与える効果について質問紙調査を用いて検討した。同じ尊敬という感情であっても、その方向が外集団に向けられるか、内集団に向けられるかによって、当然ながら生じる心理過程は異なるものであったが、その両者は集団間紛争解決という点では同

じ結果を生んでいた。この事は集団間紛争解決に対して多様なアプローチが可能であることを示唆している。現実の集団間紛争の場合、それが生じた原因や、進行している状況は複雑な要因によって成り立っており、特定の解決方略が常に利用可能とは限らない。そのような状況のために、同一の結果を生じさせるために多様な方略を用意しておくことは実践的な意味を持つだろう。

更にはメタ尊敬が集団間紛争解決に効果を持ったことは、今後の研究に対して大きな意義を持つと考えられる。これまでの集団間紛争解決研究はいかにして外集団に対するイメージをポジティブにするかに焦点が当てられていた。しかし対立している集団をポジティブに認知するよう人々を動機付けることは困難であり、それが研究・実践上の大きな障碍となっていた。それに対してメタ尊敬の利用は、外集団尊敬と同じ効果を持っていながら内集団に対するポジティブな認知の促進であるので、成員を動機付けるのは容易であり、多くの人々はむしろそのように尊敬されることを望むと考えられる。従ってこのようなメタ尊敬が集団間紛争解決に一定の効果を持つことを示すことが出来たことは、この領域における研究の新たな可能性を開いたと言えるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

熊谷智博 (2017). 外集団尊敬に対する愛着不安傾向の効果 人生活文化研究, 27, 33-38. 査読無

http://journal.otsuma.ac.jp/2017no27/2017_33.pdf

熊谷智博 (2017). 集団間和解的態度に対する大衆性の効果 大妻女子大学紀要-文系-, 49, 207-212. 査読無

熊谷智博 (2016). 外集団食文化に対する親和性が外集団特性推論及び集団間態度に与

える効果 コミュニケーション文化論集, 第 14 号, 37-50. 査読無

熊谷智博 (2015). 防衛費ジレンマに対する 集団成員性の効果 大妻女子大学紀要-文系-, 47, 27-32. 査読無

熊谷智博 (2015). 集団現実性と外集団の道徳性認知が非当事者攻撃に与える効果 コミュニケーション文化論集, 第 13 号, 29-41. 査読無

熊谷智博 (2014). 権力による脱抑制と「カント哲学の義務論」: 権力プライミングがグループジレンマ状況への介入決定および愛他的道徳性に与える効果 大妻女子大学紀要-文系-, 46, 157-166. 査読無

[学会発表](計 5 件)

Tomohiro Kumagai (1st, August, 2016). Effects of positive meta-stereotype and sense of secureness on intergroup conflict resolution. International Association for Cross-Cultural Psychology 23rd International congress (31st July -3rd August, 2016, Nagoya, Japan, Oral presentation).

Tomohiro Kumagai (28th, July, 2016). Social psychological effects of fairness and morality on intergroup aggression. The 31st International Congress of Psychology (24th -29th July, 2016, Yokohama, Japan, Oral presentation).

Tomohiro Kumagai (23rd May, 2015). Effects of meta-stereotype of respect on intergroup conflict resolution. Association for psychological science 27th annual convention (20th -23rd May, 2015, New York, USA, Poster presentation).

Tomohiro Kumagai and Nozomi Yamawaki (12th March, 2015) Effects of perceived morality of outgroup and reality of group membership on third party aggression. International convention of psychological science (12th -15th March, 2015, Amsterdam,

Netherland, Poster presentation).

Tomohiro Kumagai (9th July, 2014). Effects of familiarity with out-group's gastronomic culture on attitude to intergroup behavior. The 17th European Association of Social Psychology General Meeting (8th-12th July, 2014, Amsterdam, Netherland, Poster presentation).

[図書](計 5 件)

Tomohiro Kumagai (2017). Social Psychological Factors of Peace-Building. Conflicts and Peacebuilding: Toward the Sustainable Society (pp.101-108). GRM program, Doshisha University.

熊谷智博 (2016). 第 8 章: 対人行動 1・攻撃行動 北村英哉・内田由紀子編 社会心理学概論 ナカニシヤ出版 pp.121-127.

熊谷智博 (2016). 第 15 章: 集団間紛争とその解決および和解 大淵憲一監修 紛争・暴力・公正の心理学 北大路書房 pp.192-203.

Tomohiro Kumagai (2015). Intergroup respect and reconciliation. In B. Dordevic, T. Tsukimura and I. Ladevac (Eds.). Globalized world: Advantage and disadvantage (pp. 155-160). Global Resource Management, Doshisha University, Japan and Institute of International Politics and Economics, Belgrade.

熊谷智博 (2014). 第 9 章: 集団の中の個人、第 10 章: 集団間関係 脇本竜太郎編著、熊谷智博、竹橋洋毅、下田俊介共著 基礎からまなぶ社会心理学 サイエンス社 pp.153-192.

6. 研究組織

(1)研究代表者

熊谷 智博 (KUMAGAI, Tomohiro)

大妻女子大学・文学部・准教授

研究者番号: 20400202